

# 図書館通信 —87—

1989. 3

## 本学図書館の現状と課題

情報管理課長 坂上光明

私は昨年12月に現職に就任しました。着任後数か月を経たばかりで、まだ図書館の実情について十分に把握したとはとてもいえませんが、とりあえず今日までに知ることのできた範囲で、本学図書館の現状と今後の課題について愚見を述べ、着任のごあいさつに替えさせていただきます。また、新入生のみなさんに対しては、この拙文が図書館への案内としていくらかでもお役に立てば幸いです。

本学の附属図書館は、創設後40年、そしてこの大谷地区に現在の建物が竣工、開館してからでも20年余りの歴史を有し、現在では75万冊以上の蔵書を容し、毎年2万5千冊以上の図書と6千種以上の学術雑誌を受け入れている県下最大の図書館です（数字はいずれも浜松分館を含む）。また、全国の大学図書館の平均的な水準から見ても、それほど見劣りしない規模と内容を備えていると思います。

とくに、本学図書館の特色として指摘してよいと思われるのは、全国の総合大学図書館の中では、蔵書の集中管理と共同利用の態勢が比較的良好に整っていることです。つまり本学では、学生用として購入される図書だけでなく、教官が研究のために購入する図書も、原則として図書館に置いて全学で共同利用する慣行が比較的良好に定着しているので、教官はもちろん、学生も意欲さえあればこれらの図書を利用することができるのです。

また学生用図書についても、カリキュラムに密着した図書を各授業科目の担当教官が指定して購入する指定図書制度のほか、新刊図書の中から学生の勉学と教養の糧として、また本学図書館の蔵書として適切な図書を教官と図書館職員が協力して選定する制度（学生用図書選定委員会）が比較的うまく機能していることも、本学図書館の特色の一つとして挙げてよいと思います。

このように本学の図書館はいくつかのすぐれた特色を備えています。一方では、これから解決

しなければならない課題も少なくありません。その一つは、現在のところ閲覧室に冷房装置が備わっておらず、このため夏期には利用環境がかなり悪くなることです。できるだけ早い時期に冷房設備を設置して、快適な環境で利用できるようにするため努力していますが、その実現までしばらくしんぼうして下さるようお願いいたします。また、建築後約20年を経過してやや老朽化した内装等を順次改修して、より魅力的な読書環境を整えることも今後の課題の一つかもしれません。

しかし、なによりも本学図書館が現在直面している最大の課題は、昭和61年度から開始した業務電算化計画をさらに推進することです。この計画の目標は、図書・雑誌の受入れから、目録の作成と検索を経て、貸出し、返却にいたるまでの図書館業務の全プロセスをコンピュータで処理することにより、業務の迅速化と省力化を促進し、さらに利用者へのサービスの向上を図ることです。

ところでこのような電算化システムの根幹となるものは、コンピュータに記録される図書、雑誌に関する目録データですが、これらの目録データの作成に当たっては、これを本学だけで孤立して行うのではなく、東京にある学術情報センターという機関を中心として、全国の大学図書館等にあるコンピュータを通信回線によって結んでつくられるオンライン共同分担目録ネットワークの中で、それぞれの大学図書館が必要な目録データを分担して入力し共同で利用することにより、全国的な規模での総合目録データベースと各大学図書館の業務電算化の基礎となる目録データの形成が同時並行的に達成されるしくみになっています。

以上のような構想のもとに昭和61年10月に事務用電子計算機(HITAC-L 470 X システム)が本学図書館に設置され、翌62年4月から学術情報センターと接続するとともに、62年、63年の両年度にわたって、図書の貸出し、受入れ、目録及び雑誌管理の各業務システムが順次稼働しはじめ、

## アフリカの原野にて

嶋田 義仁

18、19世紀、サハラ以南の大平原地帯では、フルベ族と呼ばれる牧畜民が、イスラム教を奉じてあたかも突如として立ちあがり、黒アフリカ史上かつてない国家形成運動をひきおこした。しかし牧畜民とイスラム教の結びつきは謎である。イスラム教はサハラ横断の交易ルートにのって黒アフリカに広がった宗教であり、交易者の宗教、都市の宗教という性格を強くもつ。イスラム教徒には、アラビア語で記されたコーランの丸暗記学習も要求される。そのためには何年もコーラン学校に通わなければならない。そんな都市の宗教と原野の牧畜民とが、どのようにして結びついていったのか。そんな問題をわたしは考え続けているわけであるが、ひとつ印象に残る経験がある。

原野の奥の邑に住んでいたある日、遠くにウシのムレが見えた。村のウシではない。今もあてどない遊牧生活をつづける、本物の遊牧民のウシのムレだった。かれらはしかし村人に好まれない。遊牧民は国境を無視して生活し、予防接種など受けることのないかれらのウシはどんな疫病を運んでいるかもしれないからである。しかしわたしには遊牧民を知るこの上もないチャンスであった。

わたしは炎天の原野の中を走り、ウシのムレに近づいていった。ウシはゆうゆうと草を食み、ゆっくりと移動してゆく。しかしウシの世話をする牧夫の姿がみえない。どこにいるのだろうかと探すと、ウシのムレからかなり離れたところに踞って、すわっている若者らしい牧夫の姿を認めた。わたしは気楽に近づく。しかし振り向いた若者の目に、わたしは一瞬たじろいだ。その目は、赤く、らんらんと輝く、野獣のような目だったからである。気を取りなおしてみると、若者の手元にはなんと、アラビア語の冊子の頁が開かれている。若者は、熱帯の直射日光が刃のように錯乱する炎天の原野の中で、読書にふけっていたのである。

若者の目はたんに熱帯の直射日光に焼かれていたのかもしれない。しかしわたしは、原野で一人読書する若い牧夫の野獣のような目を想う時、あんな目の若者なら、ある日、原野の牧畜民を糾合して、怒濤のような国家建設運動をひきおこしても不思議はない、という気になる。若者の目は、そんな情熱と知恵、凶暴な実践力とを併せ秘めていて不思議はない、赤く、らんらんと輝く、しかし深い色をたたえた目だったように思うからである。

(人文学部・人類考古学)

## 読書のすすめ

原田 唯司

若者の活字離れが指摘されて既に久しい。書物を通さなくてもテレビその他の媒体によって様々な情報が手軽に入手できるのであるから、ことさらに難しい顔をして難しい本を読まなくてもさしあたっては困ることはないであろう。確かに、知識や情報の獲得手段としての書物は、映像や肩のこらない雑誌によってその位置をとって代わられてしまったかのような感が強い。これも時代の流れともいうべきで、例えば大学生の読書量がひところよりも急減したからといって、慨嘆するほどのことではないのかも知れない。

だが、読書の意義は知識の習得のみにあるのではない。読書を通じて自らの「ものの見方や考え方」が豊かになるという面があることを見逃すべきではない。どんなジャンルの書物であってもよい、そこで扱われているテーマや作者の意図、論理の展開のあり方などを読み手である自分の側に引きつけてじっくりと読むならば、それは格好の思考訓練の機会を提供することになる。こうした経験の蓄積が血となり肉となって、次第に自分という人間の「芯」が形作られて行くのである。書物の中味とそれを読むという行為そのものとの二つながら、個としての人格の形成に肯定的な影響を与えていると言えるだろう。

このような読書の意義がとりわけ意味を持つてくるのは、おそらく青年期であろう。中でも、時間スケジュールに比較的余裕を見つけ出しやすい大学生の時期が、書物に正面から向かい合う条件に最も恵まれている。同時にこの時期は、自分をあらためて見つめ直し、それぞれの将来的展望の下で自己の生き方を最終的に見据えることが求められている時期でもある。自らが何者かであろうとしている大学生にとって、自己の内面を豊富にし、自分という人間の確立をめざす上で、読書はとても貴重な体験になるはずである。「何を読むべきか」とは言わない、「何かを読むべき」ことを勧めたい。

(教育学部・教育心理学)

## 60万冊のWanderland?

富田 誠

平成になって初めての新生生の皆さん、入学おめでとうございます。胸をときめかせている人、少しだけ心を痛めて入学してきた人、どちらも今の気持ちをエネルギーにして一步一步新しい可能性に挑んでいっていただきたいと思います。

最近、本のネーミングに少々興味を持って気にとめるようにしています。本屋さんや図書館で何気なく背表紙だけを眺めていると、「ああ、この本を読まなかったばかりに、私はこれまでの人生でどれだけ多くの損をしてきたことか」と思わせたりする上手なネーミングをした本がたくさんあり感心させられます。ページをめくると期待どうりの内容が書いてある場合は稀にしかありませんが、逆に新しい発見をすることがしばしばあります。

偶然望ましい発見をする能力をセレンディピティ (serendipity) と言い、自然科学の場合この能力が大変重視されます。本との出会いを考えてみると、専門的分野の調査や自分の興味など、問題発展のプロセスとして目的が明確な場合には、今日では、どこかの図書館の地下深く埋もれている文献でもそれほど困難なくアクセスできてしまいます。一方、具体的目的があるわけではなく、なにかの拍子に、例えば、目的の本や検索カードの隣にたまたま並んでいたとか、どういうわけかその本だけが多くの本のなかで突然自己主張をしているように見えたりとか、偶然に望ましい本に出合うと言う経験もあると思います。偶然望ましい発見をすることはなかなか難しいものですが、この能力を磨き上げるには、自然科学の場合には、つきなみですが、よく学び、いつも問題意識をもって、好奇心を旺盛にし、また、よく遊ぶことなども大切といわれます。

入学したばかりの皆さんは感性も豊かで、好奇心は誰にも負けないと思います。専門の文献調査の方法などはガイダンスなどを通してすぐに身に付けられると思いますが、一方で、新しい興味や問題意識の出発点となるような1冊でも多くの本に“偶然”に巡り会えるよう、“セレンディピティ”に磨きをかけて、図書館をさまよってみてはいかがでしょうか。

(理学部・流体物理学・応用力学)

## 図書館と学生時代

関本 彰次

遠い記憶に頼ってではあるが、学生の頃の私は時々図書館へ行くことはあっても、どうもそれはある目的を持った読書のためとか必要に迫られた調べ事のためというのとは殆んど無かった様に思われる。当時の私は日常差し迫った事柄に促されて図書館という所へ出掛ける質ではなく、友人などがその場を活用して片付けるだろう物事を自分で抱えていても私などはとてもそこではそうした事に手が付かない質であったからである。

では何んな時に何んな心算りでそこへ出掛けたのかと考えてみると、どうも何げない気分転換を望んでいて偶たまその気分転換を求める方向が図書館の持つ雰囲気結び付いたものであったのかと思う。それは学業以外の物事に熱中していてふと我を省みなくなったとき、取り組んでいた勉強の意気込みにも似ず壁が厚く日暮れて道の遠さを噛みしめていたとき、また何とはなく兎に角充足感の希薄さを意識するとき等だったと思われる。

およそ確かな目的を持って出掛けるのは稀だったから、館に入ってからその過し方を決めるのが大方であった。ときには書架の書籍の背を隅ずみまで何度も眺め、ときに手に取って拾い読みすることで可成りの時間が過ぎた。特に、関係する分野の専門書群などはその全体を眺め渡し、興味のままだに手にすることで未熟な学生には無言の刺戟を与えるものであったのかも知れない。これといった当てもなく文献検索カードを繰って時間を費すこともあった。書架の前で書物を手にしている時もそうであったが、カードを一枚一枚繰っている時もその自分の他にもう一つの心の動きがいつもあった様に思われる。それは心の片隅での何かとの自問の働きだったようにも思われる。

何冊かの書物を借り出して机に向かうことはあっても、大抵は先程の自問の続きのことが多かった。むしろ腰を据えて自問に入る傾向があった。学問のこと、人生のこと、そして怠惰で非力な自身のこと、悩みには事欠かなかった。時には当面の問題が氷解したような気持ちになり、その糸口を見失わぬよう急いで館を出たものだが、それも稀なことであったしその事が館での書物に負うのか否かも常には明らかでなかった。拾い読みから引き込まれた文藝書を読み通して、何となく問題を積み残した意識で去るときもあった。唯そうした作品から受けた印象で今も懐しく残っているものもある。(工学部・計算機システム)

## 図書館今昔・その利用のしかた

衛藤英男

私が大学生の頃（もう20年位前になるが）、授業にノート講義というものがあつた。それは、先生がノートを読みはじめ、学生がそれを必死にノートに書き写すというもので、その時分は、今日のような小さいテープレコーダーが出回っていないため早口の教授にはかなり苦勞した。団交を開いてノート講義をやめてほしいと要望したのを覚えている。昨今では、本の出版も簡単にコピーも出回っているためそのような授業はない。

現代は情報化時代であり、図書館の在り方も大きく変わろうとしている。昔は、コピーがなかなか許されず、書き写すことが当然とされていた。必要なところはノートに書きうつしてこいといわれた。大学の授業においては、できるだけ新しい情報（文献・著書など）を学生に伝えるためコピーがよく使われている。ここで考えて欲しいのは、コピーを持っているだけで安心してしまっていないだろうかということである。持っているだけなら、必要なところを抜き出してノートに書き写すという昔の方法がずっとよい。図書館の本がコンピューターに入ってしまう、新聞も家のテレビで読む時代がすぐそこまできている。新しい図書館とうまく付き合うための新しい利用法が要求されている。情報（コピー）が氾濫している現在、それをいかに活かすかが大切ではないだろうか。いったん、頭にいれて練り直し、まとめるという努力は昔は今もかわっていない。そのことをよく考えて、図書館を大いに利用して欲しい。

（農学部・農産製造学）

### 訂正

「図書館通信」86号 p. 4 のキリル文字のローマ字翻字法のうち、Ш ш と Ш ш が入れ替わっておりました。正しくは、Ш ш を sh に、Ш ш を shch に翻字します。

## 本を売る話

毛利晶

私は生涯に（といってもまだようやくにして人生半ばに立つ年齢ではあるが）二回蔵書を売った経験がある。一度はまだ学部生の時で、その頃たまたまカール・ケレニイというハンガリーを亡命した神話学者に凝っていた。一旦惚れ込むと、その人の人生を真似たくなる。学問の領域では手がでないから、せめて形だけでもというのである。そこで私はこの碩学の如く、一生を旅に生き、各地の大学図書館を自分の仕事場にすることに決めた。そうなると蔵書なんて邪魔だ。そんな訳で、吉祥寺の古本屋に来てもらって本箱の本をあらかた売ってしまった。親爺め、「岩波書店の物などは値が安定してしまして」などと言いつつニコニコしながら帰ったところを見ると、随分ともうけさせたのだろう。

二度目に本を売ったのは、私がドイツに留学していた時分のことである。二年ばかり遊んでくるつもりの旅立ちだったから、荷物はみな千葉に住むおじの家に預けておいた。ところが彼の地の大学で、ギリシャ、ラテンのテキストや注釈、それに日本に居てはなかなか入手しがたい研究書に囲まれて暮らすうち、少し腰を落ち着けて勉強したくなった。滞在が長引くとなれば、そういつまでも荷物を人の家に置いておけない。留学三年目のクリスマス休暇を利用して一時帰国した時、必要最小限の物だけを親のもとに送りつけ、残りは全部処分してしまった。ケレニイ先生に対する情熱が冷めるに反比例して棚の本も増えていたが、その機会に洋書だけを残し、和書はすべて売り払った。将来必要がでてきても、図書館から借りればよいと思ったからである。

七年に渡る留学から帰り、静岡に職を得た今になって、私は青春時代に犯した過ちを悔いている。日本の図書館は随分と利用しづらい。自分の本を手もとにおいておかないと仕事の能率が落ちる。そこでかつて売った書籍の多くを買い戻すはめとなった。なかには絶版のため定価の十倍以上を払った本もある。新入生諸君、見境無く本を売ることはよそう。一生後悔することになりますよ。

（教養部・ドイツ語）

## 浜松分館電算化について

すでに本通信でも紹介していますが、電算化にともない、本館、分館とも利用方法等が変更されています。分館につきましては、本館に準ずるということですが、遠隔地のため、運用面で若干違いがありますので、ここで簡単に分館の利用法等について紹介します。

### 1. 貸出返却

本館同様「図書館利用票」を使い貸し出しを行います。図書に「図書館利用票」を添えて係員に提出してください。OCRリーダーの読み取りにより、貸し出し手続きを行います。従って、図書の貸し出しに際しては、利用者は何も記入する必要はありません。『岩波新書』『化学の増刊』等のように別置されていて、図書の背表紙にラベルのないものがありますが、これらについても同様の扱いです。ただし、雑誌については、一時貸し出しのみ認めているだけです。今のところ機械処理はしていません。従来通り、カウンター上にある「雑誌貸出簿」に必要事項を記入して貸し出しを受けてください。

「図書館利用票」は、本館、分館ともに共通です。学部生は教養部時に使用していたものをそのまま浜松でも使います。ただ、大学院生は、学部時に使用していたものは使えません。身分の変更があった場合には新たに利用票を発行しますので、新しい利用票と交換してください。研究生についても同様です。

返却に際しては、カウンター前のブックトラックに図書のみ置いてください。（「図書館利用票」は不要です。）後で一括処理しますので、貸し出しの更新をしたい場合、又は追加貸し出しを受けると冊数をオーバーしそうな時以外は、係員に申し出る必要はありません。

貸し出し時、画面上に「停止コード」あるいは「冊数オーバー」と表示されることがあります。これは返却が遅れている図書がある、あるいは、貸出冊数の上限を越えたとの表示です。このような場合は、新たな貸し出しを受けることはできません。該当の図書を返却してから、再度貸し出しを受けてください。

### 2. 図書目録

本館では、図書目録についても電算化され、記述方法も変わりましたが、分館では、従来通りカードでの目録を維持しています。従って検索も今までと変わりありません。不明な点は遠慮なく係員にお尋ねください。

### 3. その他

（利用状況）

電算化により、図書の利用状況を簡単に調べることができるようになりました。利用者側にあつては、貸し出しを受けたい図書が書架になかった場合、いつ返却されるか知ることができます。また、自分が今何冊借りているか、どのような本を借りているかなどの問い合わせにもお答えいたしますので、御利用ください。また、図書館側にあつては、どのくらいの貸出冊数があるかなどの統計の表示や、期限切れの図書の督促が速やかにできるようになり、より多くの方に利用していただくための一助となっています。

（分類法）

図書を排架するにあたり、日本十進分類法を使っていますが、昭和63年4月受け入れのものより、新訂8版を採用しています。これにより、同じ主題のものでも排架位置が変わってしまう場合があります。特に情報科学、情報工学に関しては、大幅に変わっていますので、書架の案内等を参考に御利用ください。

電算化されたと言っても、分館に関しては、まだまだ始まったばかりです。今後は、機械による目録検索、情報検索をはじめ、予算執行状況の確認等が利用者自身の手で平易にできるよう、各種のデータや環境を整備していきたいと思っています。

(p. 1より)

現在では8万冊以上の図書をコンピュータの端末から検索することができ、以前より簡便な手続きで利用することができるようになりました。

このように図書館の業務電算化計画は当初の目標に向かって着実に前進しつつありますが、残された課題も少なくありません。拡大した業務を迅速かつ効率的に処理できるよう電算機システムの性能と構成を強化すること、浜松分館の業務を本館と同じ規模で電算化し、両者を統合するトータルシステムを構築すること、また、近く実現する本学の情報処理センターと協力し、学内LAN（ローカル・エリア・ネットワーク）を利用して、図書館の蔵書目録データベースを研究室等の端末から居ながらにして即時に検索できるシステムを実現していくことなどが今後の重要な課題です。これらの課題を解決していくためには、図書館職員の努力はもちろんのことですが、全学の教職員及び学生の皆様の御理解と御協力が必要です。どうかよろしく御支援くださるようお願いいたします。

## 教職員著作寄贈図書(本館)

加藤芳朗（名誉教授）

『地学・土壌・考古環境』加藤芳朗先生自選論  
文集刊行会☎613.51/KA 86

新井智一（名誉教授）

『浜松張子』〈編著〉編著者

☎759.9/A 62

『ふる里の手毬』著者

☎759.9/A 62

佐藤照雄（教育学部）

『社会科教育の理論と実践』〈編集代表・執筆〉

東洋館出版社☎375.3/KY 4

『中学校社会科教育実践 1～3』〈責任編集〉

酒井書店☎375.3/NA 25/1～3

土 隆一（理学部）

『静岡県の自然景観』〈編集〉第一法規出版

☎490.915/TS 25

## 人 事 異 動

○配置換（63. 12. 1付）

杉尾勝茂

（情報管理課長→東京工業大学附属図書館情報管理課長）

坂上光明

（浜松医科大学教務部図書課長→情報管理課長）

## お知らせ（本館）

◎休館

平成元年3月6日（月）～3月10日（金）

平成元年3月27日（月）～3月31日（金）

入試関係および蔵書点検のため。

◎春期休業中の閉館時刻

平成元年3月22日（水）～4月10日（月）の休業期間中、閉館時刻は次のとおり。

平日 午後5時

土曜日 正午

◎春期休業中の長期貸出

平成元年2月15日（水）～4月8日（土）の間に貸出した図書の返却期限は、平成元年4月17日（月）とします。

なお、卒業見込者および工学部3年進級見込者には、長期貸出を行いません。

～ 新入生のための図書利用案内のお知らせ

## ライブラリー・オリエンテーション

第1部： 図書館および資料の案内と利用法の説明、書庫案内

期 間： 平成元年4月17日(月)～4月21日(金)

開始時刻： 第1回 午前11:00

第2回 午後1:30

第3回 午後3:30

所要時間： 毎回30分～40分

集合場所： 喫煙コーナー（4階閲覧室入口右側）

第2部： 図書検索用端末の利用法の説明

期 間： 平成元年4月24日(月)～4月28日(金)

開始時刻： 午後1:30～4:00の間、随時

所要時間： 毎回20分～30分

集合場所： 端末前（4階レファレンスカウンター側）